慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エリーカ・ケーニッヒ著 ドイツ社会民主党と経済独占の到来
Sub Title	Erika König: Die deutsche Sozialdemokratie und die aufkommenden Wirtschaftsmonopole
Author	正田, 庄次郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.5 (1959. 5) ,p.464(78)- 469(83)
JaLC DOI	10.14991/001.19590501-0078
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19590501-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

それに都合のよい部分だけを史実の中から求める方法、あるいは社会構造の異なった場所に見出される歴史法則を当てはめると言う様なやり方は否定されねばならない。しかし、だからと言って、史実の多様性の内に埋没してしまう事は許されない。我々はその内から一定の方向を見極めねばならないし、時代の「評価」を決定すべきであろう。

著者がこの書で依拠された史料は、藩政史料が殆んどであった。従って在方商業に対する領主側の政策についてはよく知る事ができたと言える。しかし、在方商業そのものの内容はもはやこの種の史料からは求められない。やはり各地の「在方」史料から得るべきであると考えるが、これは著者も指摘する如く非常に困難であるに違いない。「在方商業」の研究であるならば、藩側の史料のみではそれこそ「一面的」な理解しかできない。何故なら実体となる「在方商業」それ自身は商人の経済行動であり、まさにそう言った点において「在方商業」としての特質を持つものであるから。

この様に考えてくると、氏の著書は、「近世在方商業政策の研究」と題していただきたかった気がする。若し「在方商業の研究」であるなら、少なくとも、最初に述べた様に、商業を経済の一環として考える考え方から出発して、土地制度、村落構造に関する研究成果を十分に取り入れていただきたかった。また農民的商品生産との結びつき、日本における資本主義成立に対して演じた歴史的役割について、すなわち、在方商業による資本の蓄積、農民層分化、市場の成立等の基本的問題についての検討を期待したかったのである。困難な研究分野に一つの業績を発表された氏の努力に敬意を払いつつも、問題の重要さの故に敢えて批評を試みた次第である。本書をいわば土台石の一つとして氏ならびに学界全体のより深き前進を切望するものである。（吉川弘文館発行、昭和三十三年十一月、本文四二三頁、索引を附す。七八〇円）

（速水　融）

エリーカ・ケーニッヒ著

『ドイツ社会民主党と経済独占の到来』

(Erika König: Die deutsche Sozialdemokratie und die aufkommenden Wirtschaftsmonopole, Dietz, 1958.)

一

本書は、ドイツ帝国主義史研究の共通テーマのもとに、クチンスキーの二著（„Monopole und Unternehmerverbände“, „Propagandaorganisationen des Monopolkapitals“）と、シュミットの „Die BEWAG-Transaktion im Jahre 1931“ について出版された。

内容は、第一章一八九四年フランクフルト党大会における独占の評価、第二章独占資本主義と修正主義、第三章独占と労働貴族、第四章一九〇〇年マインツ党大会における帝国主義の評価、の四章からなっている。

まず、各章ごとに論旨をみると、第一章では、独占に対する社会民主党の評価分析の出発点をフランクフルト党大会におく。それは、この大会が、第一に、当時充分に成長した独占体を背後に、はじめて資本主義の構造変化をとりあげたからであり、第二に、改良主義を提唱したフォルマール演説（一八九一年）が党大会のシッペル演説となった点で、機会主義（Opportunismus）の発展に一時期を劃すからであった。著者はリーザーの著書（Die deutschen Großbanken und ihre Konzentration im Zusammenhange mit der Entwicklung der Gesamtwirtschaft in Deutschland, Jena, 1912）、ヤイデルスの著書（Das Verhältnis der deutschen Großbanken zur Industrie mit besonderer Berücksichtigung der Eisenindustrie, Leipzig, 1905）およびクチンスキーの前掲著書などによって、金融資本の確立過程と、植民地侵略の推進者の姿をえがいたうえで、フランクフルト党大会の審議を分析する。

著者はまず、分析基準として、第一次大戦まで帝国主義の理論は未確立であり、他面、マルクス、エンゲルスが、予見的な形で独占理論の基礎をすえたことを指摘する。そして、この大会の審議から、一方にカルテルに価格引下げの推進者、生産安定化の保証をみ、労資協調をとくシッペルの演説をとりあげ、これに、ルクセンブルグ、ショーエンランクら革命的マルクス主義者の独占体に対する評価を対置させながらつぎの点を指摘する。

第一に、シッペルの演説と実際に採択された、言葉だけ革命的な決議とのちがいに、理論闘争を極力避け、実践で浸透をはかる機会主義者の特徴と、これに対する党指導部（ベーベル、カウツキー、リープクネヒト）のあいまいな態度が示される。とくに、他ならぬシッペルに独占体調査の大会決議を担当させたことに、これはよく示されている。

第二に、採択された決議は、一面で、エルフルト綱領に依拠しながらも、マルクス主義的資本蓄積法則と、マルクス主義国家理論からはずれている。特に後者が社会民主党の根本的な弱点であった。

第三に、この時まで機会主義者（Opportunismus）は、マルクス、エンゲルスを引合いにだすず、自分の発意として改良主義を提唱した点で、その後の発展と区別される。

二

第二章では、一八九四年のフランクフルト党大会で、改良主義者と革命的マルクス主義者に二分され、党指導部は折衷的態度をとったが、ひきつづいての改良主義的傾向増大の中であらわれたベルンシュタインの『諸問題』（„Die Probleme des Sozialismus“）、

『諸前提』（„Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie“）をめぐるベルンシュタイン論争を、シュトゥットガルト党大会（一八九八年）とハノーヴァ党大会（一八九九年）の討議を通して分析する。著者は、ベルンシュタイン論争に終止符をうったハノーヴァ党大会が、修正主義の理論的側面の討議を省き、ただエルフルト綱領に関連する部分に限ったこと、およびベーベルの報告と決議が大会の方向を決した事をついて、次の結論を導く。

第一に、一八九九年当時、ドイツ社会民主党は、まだ改良党になってはいないが、党の統一を絶対視し、ベルンシュタイン論争の本質をつかまず、それを戦術のちがいからくる論争一般として理解した、ベーベルらドイツ社会民主党指導部は、客観的に機会主義者、修正主義者の活動を助長した。

第二に、このドイツ社会民主党の大会でなすべくしてなされなかった事は次の点である。

(イ)修正主義が労働運動に与える影響を明らかにすること

(ロ)ルクセンブルグ、ツェトキンらの除名要求の実現

(ハ)資本主義の構造変化の分析にもとづく、戦略、戦術の確定

第三に、一般的にはドイツ社会民主党内における、理論軽視、特殊的には、ベーベル、リープクネヒトらに根強い国家論の弱さが、機会主義、修正主義の増大を助けた。

三

第三章では、ベルンシュタインがイギリス労働運動の中に、世界市場独占の上に立つイギリスブルジョアジーとそれに対応する特権的プロレタリアートをみず、ここに社会改良と階級調和の夢をみた点をつき、これが、独占ブルジョアジーの意識的なイデオローグとしての性格にもとづく事を指摘する。

そして、一八九〇年代迄に、すでにドイツのブルジョアジーもまた、資本輸出、外国人労働者の自国における搾取、保護関税を柱にして、労働者階級の一部を経済的に買収するのに充分な資金をもっていたとする。

著者によると、こうしたドイツブルジョアジーの意識的な労働者階級に対する買収は、一八八一年十一月一七日の国会報告以後の一連の保護立法によって始まったとする。

これに対し、一九〇〇年頃のドイツ社会民主党は、プロレタリア国際主義と民族自決の原則の固守において誇るべきものをもっていたし、一れんの社会改良案に対しても原則的立場を固持していたことを、ドイツ社会民主党大会の討議を通じて明らかにする。

反面、ドイツの労働貴族がとくに独占的産業に発生し、Legien がその代表的存在であったこと、これら労働貴族が組合官僚に結集し、国会フラクションを中心に根強い力をもっていた改良的議会主義を支持し、これに対して党指導部が、屈服に近い妥協的態度をとって、客観的には、機会主義、修正主義の力を強め、労働貴族＝組合官僚の影響力を強めることとなった点を指摘する。

四

第四章、マインツ党大会での帝国主義の評価、では、一八九〇年代の、ドイツ帝国主義の侵略政策（南アフリカ、近東、東アジア）を明らかにしつつ、社会民主党内の革命的マルクス主義者が、これと一貫して闘ったのに対し、シッペル、アウアー、ハイネを先頭に、機会主義者の帝国主義の立場への移行がはじまり、ベルンシュタインは植民地問題で全ドイツ同盟（帝国主義侵略政策の推進者）と全く一致するに至ったことをのべる。そして、党中央機関紙が、かかる侵略政策にむしろ平静な態度をとった事を不吉な思いをもってかく。

こうした経過の中でひらかれたマインツ党大会（一九〇〇年）は、すぐれた指導者ジンガーを先頭に、レーデブールらの正しい活動によって、現在なお誇りうべき、プロレタリア国際主義と民族自決の二つの決議を採択したが、ジンガーは侵略政策のにない手を軍国主義に求めた点で誤りを含み、ルクセンブルグがこの点でも正しい見解に達していたことを明らかにする。一方機会主義者は、「社会主義月刊」（Sozialistische Monatshefte）によって社会帝国主義的見解を主張し、正しい決議にもかかわらず、実は機会主義・修正主義の力は一そう強まっていた事情がのべられる。

マインツ党大会に限らず、すべての党大会において示された、党指導部の機会主義者、日和見主義者に対する妥協的態度が、ついにドイツ社会民主党の死命を制するに至る点が強調され、革命的マルクス主義者がなすべきであった第一の事は、ルクセンブルグ、ツェトキンのベルンシュタイン一派の党追放を実現する事であったとして、稿を結んでいる。

五

以上がこの本の要旨であるが、全体を貫くものは、帝国主義の経済的本質は独占資本主義であり、それは法則的に労働貴族を生みだし、そのイデオロギーが機会主義・修正主義であるという考えである。いうまでもなく、これはレーニン的定式といえる。著者はこの定式に忠実に従いながら、これを事実によって裏づけようとしている。これがこの本の特色であって、ここに問題を含んでくる。

私はつぎの点に本書の意義を認める。

第一に、従来、改良主義・修正主義が、きわめてひんぱんにいわれるわりに、その研究書はきわめて乏しい。こうした中で、改良主義・修正主義批判の従来の定式ともいえるレーニン的定式をまとまった形で再現してくれたこと。これはこの途の研究をやる者の誰かが手がけてよいことだと思うからである。従って、この本が新しい何かをつけ加えたことによってではなく、この本が、今日までの歴史的体験と、学問の諸成果のうえにたって、しつようなまでに吟味

しつくさるべき対象を提供したといういみで、著者の労を多としたい。

第二に、資本主義の構造変化と機会主義、修正主義というテーマを追求するに当って、一八九四年のフランクフルト党大会を分析の出発にすえたこと、機会主義の抬頭の一定の時点に、ベルンシュタインの修正理論が『諸問題』『諸前提』の二著にまとめられ、これがどのように、シュトゥットガルト党大会（一八九八年）、ハノーヴァー党大会（一八九〇年）で問題にされたかを通して、修正理論をむかえる当時の社会民主党の実態を明らかにしようとすること、および、ベルンシュタインが修正主義理論を発表した時点において、イギリス、ドイツの労働運動、社会政策の実態を明らかにすることによって、かれの楽観的見透しと正に逆な事実を論証し、これを通じてベルンシュタインの党派的性質にきりこもうとするすすめ方、の三点を積極的に評価したい。

六

他面、私はつぎの諸点に、みたされないものをかんじた。

第一に、――これが根本的なことだが――著者の問題意識は何かということである。

著者はこの本を通じて、カウツキーの批判にくらべ、ルクセンブルグおよびツェトキンの批判が、原則的で一貫性をもっていたことを説く事によって、機会主義・修正主義に対する批判の有効性を、

そのイデオロギッシュな鋭さに負わせているように思われる。「ベルンシュタイン一派を党から追放してさえいたら」といった口調はこれと無関係には考えられない。私は、修正主義の問題が鋭くイデオロギッシュな側面をもっていることを否定しないし、また、共産党の出現が世界史的な必然として考えられている以上、当時の社会民主党の指導部の折衷的態度は、冷静な評価を加えらるべきであることに異存はない。しかし、今日、機会主義・修正主義をあらためて研究の対象にしながら、レーニン的定式の確認にとどまり、イデオロギー闘争の重視と、それら分子の断乎とした追放だけを歴史的教訓としてつかもうとするならば、やはりその問題意識そのものを問わぬわけにはいかない。この本が、論証を通じて定式がうきぼりになるというより、定式に論証がよりかかっている甘さと別のものではない。事の性質が鋭くイデオロギッシュであればあるほど、高い問題意識とみずみずしい現実感覚が要求されるのであり、強じんな論証力によってのみ「政治」によりかからない学問の存在を主張しうるのだと思う。

残念ながら、著者は、現在の切実な問題、即ち現段階における世界資本主義の法則性の解明、社会主義移行についての理論的究明、国家理論の深化――民主主義的諸制度の評価と結合して――、社会主義運動と労働運動、民族運動の関係、戦争についての問題との関連性を念頭においているとはいえない。これが一ばんみたされぬ点でもある。

第二に、個人の評価に機械的なものを感じさせる。即ち、善玉、悪玉的類型化がかんじられる。それには評価の基準の理論的確定と、個人の活動が、主体的側面からも具体的、多面的に検討されなければならぬと思う。

第三に、この本では、機会主義者、修正主義者、労働貴族（組合官僚）がそれぞれどのような共通性と差別性のうえにたち、どのようにからみあいながら、それぞれ流れをつくっていったかが明確でない。Gay のように、ベルンシュタインの中に理論的性格と節操をみ、機会主義者と労働組合幹部に、その場しのぎと無節操をみるのは論外としても、それぞれの流れは、具体的に究明される必要があろう。

（正田 庄次郎）

ドナルド・リード著

『ピータールー――虐殺とその背景』

(Donald Read; Peterloo, The 'Massacre' and its Background, 1958)

一

イギリスにおける社会運動史の研究は、ここ数年来、いちじるしい発展をとげつつあるようである。われわれはわずかに、海外出版物のカタログを通じてその一端をうかがい知るにすぎないが、たとえばその研究動向のもっとも大きな特徴として、つぎのような諸点があげられよう。(一)ウェッブやコール等のいわゆる古典的通史的な研究から進んで、個別的なオリジナルな研究が出現しつつあること、(二)従来のフェビアン主義やホィッグ史観とは別に、マルクス主義的な立場から接近しようとする若い人々が登場しつつあること、(三)今迄かえりみられなかった新しい資料の発掘によって、従来の研究の間隙を充たそうとする真摯な努力の成果があらわれつつあることなどである。マルクス主義の立場からする研究については、筆者は今迄しばしばふれてきた。ここにとりあげた労作は、十九世紀初頭、イギリス労働運動史上無視することのできない大事件「ピータールーの虐殺」を対象としたものであり、その明確な問題意識や透徹した分析視角はもとより、まれにみる厳密な資料的把握の上に立っている点からも、注目すべき力作であるといえよう。また、これより少し前に、ホワイトの「ウォータールーからピータールーへ」(R. J. White; Waterloo to Peterloo, 1957)もでたが、同じ時期をとりあつかう研究が、ほぼ時を同じくして、現われたことは興味深い。ホワイトは、ケンブリッジ大学の歴史学の講師で、ダウニング・カレッジのフェローをしている。ここにとりあげた労作の著者リードは、リーズ大学の歴史学の助講師(Assistant Lecturer)である。ホワイトの労作は、ホィッグ的史観の代表者であり、英国史